



『All in all it was all just bricks in the wall』¹⁾

山本 雅博

「バブル崩壊後の日本の経済を日本人自らが選択して新自由主義に改造する方向へと導いていった」²⁾ のとほぼ同時に、日本の学术界においては「選択と集中」により国内では勝ち組と負け組に分かれたが、国際的には日本全体が負け組となってしまった。「日本のメーカーの製品は世界市場から消え、日本の科学技術力は低下の一途で、大学では学生が学問していない、どこか、大学の研究者がろくに学問を修めていない」²⁾ とまで厳しい指摘がなされている。分析化学会の近畿支部の若手の集まりでも、大学は何故こうなったのか？と意見を求められたが、大学にずっと籍をおいていたものとして、責任の一端があることは間違いない。

人、資金、時間という量的なものをご支援いただきたいという学术界からの声は多くの学会誌の巻頭言等で提言されているが、これまでの流れを断ち切らない限りV字回復は望めそうにない。「儲かる大学」、「国立大法人改革等」の政策が矢継ぎ早にでてくるところをみると、この流れは継続し、少子化との相乗効果により学术界は加速度的に^{ちやうらく}凋落していくことになるのかもしれない。

分析化学は、化学（科学）において極めて重要な分野であり、近代科学の手法である「仮説を実験で実証してゆく」ための第一関門をなすものである。したがって、どこの研究室にも既に機器分析装置はあたりまえの存在として既にビルトインされており、多くの研究者は通常のユーザーとして使っていることが多い。そのためであろうか、分析あるいは分析化学は研究者の意識のなかで、最先端あるいは最重要な研究の分野ではないように見られていることさえある。我々分析化学者は、分析手法の原理から装置開発までを担っており、原理のサイエンス、装置のエレクトロニクス、解析の統計分析学等すべてを熟知していないといけない。しかし、ESI マスのイオン化過程のようによくわからないけどもイオン化され実際に分析されているという例もあり、最も大事な原理は完全には確立しているとはいえない。ただ、むしろそこに希望がある。「選択と集中」からたとえ外れたとしても、「生き抜く創造性にこそ希望はある」³⁾ ののではないだろうか？ 閉塞感しかないこの時代に「壁のなかのただの一つのレンガ」¹⁾ にすぎないのか？ それとも自らの壁を壊して多くの人々との交流のなかで something new を創造していくことができるのか？ それが分析化学のポイントであるような気がしてならない。

分析化学会近畿支部では、支部創設 70 周年記念の記念会を 2023 年 6 月末に開催し、支部会員の 1/10 以上が集まって、コロナ後の再会と支部の今後の展望について話し合った。このような機会が、我々が生き抜く創造を生む土台となることを祈願してやまない。

[YAMAMOTO Masahiro, 日本分析化学会近畿支部長, 理事]

- 1) Pink Floyd: *The wall* (1980). (ピンク・フロイドのアルバム「The Wall」の収録曲の一節。“結局すべて、それは壁の中のレンガだった”の和訳がある。)
- 2) 田中宏和：世に倦む日日 (ブログ)「勝ち組」による「負け組」への暴力」2023 年 11 月 8 日。
- 3) 吉見俊哉：“敗者としての東京”，(筑摩書房) (2023)。